

今日の説教のポイント<創世記4章17~26節>

①「町」の賑わいは“さすらい”を解消し得るか？

兄弟アベルを殺したカインは、神の守りを受ける中、ノド（さすらいの意）の地に住みました。そこで彼は「町」を建てました。初めて聖書に出て来る「町」です。“さすらい”を「町」で振り払えるのでしょうか？ それは人間がそこでどのように生きていくかにかかっています。単なる人の賑わいでは“さすらい”、すなわち、深い不安や孤独は解消しません。神を見上げ、神に聞いて生きる人々の町（共同体）で生きる時に、神からさすらい出た生き方は終わるのです。（残念ながら、聖書で次に「町」が出るのはノベルの名が出て来る10章10節です）。

②カインの系図から商業、工業、文化芸術が生まれたことの意味

カインの次に聖書が注目するのはレメクです。その彼は、③で示すような傲慢で残虐な人間でした。聖書は、彼が二人の妻を持ったことも指摘します。それは、夫婦が互いに信頼し合って生きるように神様が造られた姿を壊すものです。このレメクの子たちから商業、工業、文化芸術が生まれたと聖書は記しますが、「レメクが罪人だからこれらも罪」と決めつけるだけでは何の意味もありません。聖書に出て来る人物は皆、私たちが代表しているからです。聞き取るべきは何でしょうか？

③カインを赦し守った神。それを仇で返すカインの子孫レメク

神様がカインの罪を赦し、そのカインを守ったということをレメクは知っています。その上で、その神様をあざけり、傲慢の極みの姿を見せるレメクです。しかし聖書は、神様はその彼を裁かれたといったことは何も記しません。このような生き方をしていること自体が決して幸いではなく、もう裁きの中に置かれていることを思わなければなりません。

④神様を見上げて生きる人セトの系図の始まり。彼も私たちの代表

セトとその子エノシュも私たちが代表している存在です。「**主の御名を呼び始める**」とは、神様を礼拝して生き始めたということです。私たちが神様を見上げ、神様の御言葉に聞き、神様を礼拝讃美しながら生きるなら、それはここに記されたエノシュの姿なのです。神様に聞いて生きる時に、商業も工業も文化芸術も神様に祝されたものとなるのです。